
角 山 榮 編

『日本領事報告の研究』

同文館 1986.12 xiv+530 ページ

1

本書は、領事制度と領事報告(各国で活動していた領事が本国政府へ送った現地の通商経済情報)というユニークな対象に多面的かつ精力的に取組んだ共同研究の成果である。本書が取扱っているのは主に明治・大正期の日本に関する史実であるが、論点は多岐に及ぶため、まず目次を掲げておくのが便利であろう。()内は執筆者である。

序章 序論的考察(角山 榮)

第1部 領事制度と領事報告

第1章 形成期における領事制度と領事報告
(古屋哲夫)

第2章 領事報告制度の発展と「領事報告」の刊行
——『通商彙編』から『通商彙纂』まで——
(高嶋雅明)

第3章 農商務省の海外貿易情報(角山幸洋)

第4章 商品陳列所について(高嶋雅明)

第5章 輸出品物の技術的課題(今津健治)

第6章 イギリスの領事制度および領事報告
(角山榮)

第II部 領事報告とその情報

第7章 領事報告にみる日本船の海外進出

——三菱の時代——(片山邦雄)

第8章 明治前期の日本マッチ輸出と『領事報告』

(杉本俊宏)

第9章 英領海峽植民地における円銀流通と

その終焉(山本有造)

第10章 李朝末期における日本人の米と土地の収奪

(朴 宗彬)

第11章 20世紀初期揚子江中下流域の貨幣流通

(黒田明伸)

第III部 資料編

序章と第I部の諸章では、領事制度および領事報告自体が論じられる。第I部を展望する意義も持つ序章では、19世紀半ばから第一次大戦期まで、イギリスを除くヨーロッパ諸国や日本が活発な領事活動を通じて海外の通商情報の収集に努めていたことが述べられた上で、外務省と農商務省を中心として推進された明治期日本の海外通商情報戦略が概観される。第1章では、明治初年代の日本において自国民保護とともに貿易情報の獲得を目的として領事制度が形成されていった過程が明らかにされ、初期の領事報告が、輸出促進のために各府県や新聞を通じて公表されていた事実が指摘される。第2章では、明治政府の貿易政策の展開と密接な関連を持って、領事報告制度の整備が進められたことが解明され、外務省における領事報告の報知体制の変遷が詳述される。第3章では、農商務省が明治17年頃より海外貿易情報の収集と公開を積極的に行うようになったこと、とくに日清戦後には領事報告のみでは情報が不十分であるため、農商務省が必要な情報を、外務省への特別な依頼、あるいは管轄下にある海外実習練習生、囑託・調査員などを通じて独自に入手するようになったことが論じられる。第4章では、商品に関する具体的な情報を提供する商品陳列所が、ヨーロッパ諸国におけるその普及とほぼ同時に、諸府県および農商務省によって設立された事実や、それらの機能・活動状況が明らかにされる。第5章では、明治政府が工業所有権制度や度量衡制度の樹立など技術に関する行政制度の整備を進めたこと、明治期の経済発展を支えた最終消費向の輸出工産物が世界市場に進出する際、斉一性、意匠、堅牢度、荷造などに関する技術水準を向上させる必要があったこと、そうした技術的課題を解決できなかった工産物の多くが輸出産業としては衰退していったことなどが論じられる。第6章では、日本との比較の意味で、ヨーロッパ諸国、とりわけイギリスの領事

活動が検討され、イギリスにおいては国家の介入が民間企業の自由な活動を妨げるとする自由主義思想が支配的であったために、領事活動が他の諸国と比べて不活発であったことが、イギリスの貿易活動の停滞ないし衰退と関連づけて主張される。

第II部には、領事報告を史料として用いた実証研究が収録されている。第7章では、明治中期の日本郵船成立以前における日本海運業の海外進出の実態が検討され、上海、香港、ウラジウォストックの各港と日本を結ぶ3つの航路が三菱の活動を中心に分析される。日本の海運業者のなかには早くから遠洋航路に関心を持つものが相当数存在したという点が、筆者の最も強調するところであるが、そうした先駆的な経験は後の本格的な海外進出にどのように生かされたのであろうか。なお領事報告は、上記3港における各国海運業の進出状況や、名誉領事(貿易情報などを得るために現地に設置された外国人の領事)の日本海運業に対する提言を紹介する際に用いられている。第8章では、重要な輸出産業であったマッチ工業の明治10~20年代における発展過程が分析される。とくに明治20年代初頭の領事報告に依拠して中国マッチ市場を分析した箇所では、日本製品が中国南部にあっては支配的な地位を誇っていたものの、北部ではドイツなど欧州の製品が優位に立っていたこと、その背後には製品に対する両地域の需要が異質であるという事情が存在したこと、将来における中国製マッチと日本製品との競争を領事が予想していたことなど興味深い新事実が示される。なお、明治30年代以降の中国マッチ市場の展開がいかなるものなのか、その解明が期待される。第9章では、明治4年の新貨条例で誕生し、英領海峽植民地、とりわけシンガポールにおいて墨銀に次いで広く流通していた円銀につき論じられ、日清戦争の結果、大量の円銀が流入して、当該地域の通貨不足が緩和されたこと、しかしこの円銀の相当部分はシャムや中国に搬出されて流通から脱落したため、まもなく実現した日本の金本位制の採用に際し、憂慮されていた大量の円銀の還流が生じなかったこと、その後も円銀は自由通貨として海外で流通していたことが解明される。論旨明快な好論文であり、領事報告が駆使されている点でも注目されよう。疑問を1点のみ述べれば、円銀や香港ドルが、墨銀と同位同量の銀貨でありながら墨銀に容易に匹敵・代替しなかったのはなぜだろうか。第10章では、日本の工業化の進展と平行して朝鮮から日本への米の略奪的搬出が進められ、その過程で朝鮮における日本人商人の経済力が強まったこと、また、日清戦争前後、とくに1902年

頃から朝鮮での日本人の土地収奪と農業経営への進出とが活発化したことが論じられる。朝鮮に進出した日本人米穀商と現地の商人との比較などは今後の重要な検討課題と思われる。なお、この論文で使用された領事報告は、朝鮮に対する日本の経済侵略の様相をリアルに伝えている。第11章では、19世紀後半以降、統一的な通貨がなく、「雑種幣制」下にあったといわれる中国の揚子江中下流域に第一次大戦期以降、袁世凱銀元と、銀元を兌換貨幣とする中国銀行券とが普及し、他方、漢口を中心とする揚子江中流域の銅貨圏が1920年代に崩壊して銀貨圏へ包摂された事実が詳細に明らかにされ、1935年の南京国民党政府による幣制統一の素地がそれ以前に形成されていたことが展望される。ただし銅貨圏崩壊の要因に関する記述はやや難解に思われた。領事報告はここでは中国語の史料を補完するものとして使用されている。

100ページ余りの第Ⅲ部には、領事制度関係法令、領事報告に関する規定、領事・領事館関係の諸情報が収録されている。

2

これまで史料として活用されていない領事報告が、経済史などの研究領域に有益であることは第Ⅱ部の諸論文を一読すれば明白である。しかし本書公刊の意義は領事報告の史料的価値を読者に教える点にはとどまらないであろう。とくに、情報が経済発展に及ぼす影響を考察する際、本書に収録された諸事実は重要な素材となるように思われる。たとえば、自由主義思想の影響で領事活動に消極的であったイギリスが貿易の面で19世紀後半以降後退していったのに対して、その面でめざましい発展を遂げた日本などが領事活動に積極的であったことや、19世紀のアジア諸国の中で唯一工業化を開始しえた日本が、他のアジアの国々とは異なって、活発な領事活動を行っていたこと(序章、第6章)などは、国家による経済情報の収集と公開が経済発展と深く関わっていたことを示唆している。明治政府が海外の経済情報の収集と公開に務めていた事実は第1~4章で詳細に解明されているが、その他第8章には、この章の考察の基礎となったマッチ市場に関する調査が、民間の一製造業者の依頼を契機に実施されたものであることが記されており、明治政府が民間企業に対して海外経済情報を積極的に提供していた事実がうかがわれる。こうした地味できめ細かな施策の積重ねが、第5章で明らかにされた工産物輸出の伸びを可能にした一因なのであろう。

さて、明治期に領事報告が外務省と農商務省(およびその前身の内務省)という2つのパイプを通じて公開さ

れていたことは本書で詳細に解明されたが、両者の関連は必ずしも明らかにされていない。たとえば、明治10~14年および明治20年代半ばに2つの官庁がともに領事報告の公開を制限した理由に関しては、より詳しい説明が欲しいところである。また農商務省の海外通商情報戦略に関する記述がやや平板なのが惜しまれる。第Ⅰ部を通読して得た印象によれば、それは、単線的にはなくいくつかの面期を経て展開していったように感じられる。すなわち、この分野に関する同省の活動の1つの山は、発行部数3万部を記録した『農商工公報』の刊行(明治17~21年)であり、今1つの山は、明治29年以降における海外通商情報の収集・公開の活性化であろう。前者は、在来産業の発展を重視する壮大な勸業政策構想を持っていた前田正名の上申によって実現したといわれ(123ページ)、後者はいわゆる日清戦後経営の一環をなすものと考えられる。農商務省の政策構想や政策立案などに関する考察を加えつつ、同省の海外通商情報戦略の展開過程をさらに詳しく検討することは、明治期勸業政策の実態を知る上でも有益と思われる。

その他、領事報告の情報を入手・活用していた商工業者の実態、国家が収集した情報と商社や商業会議所などが集めた情報との関連、第一次大戦後における国家の情報戦略の展望などがより具体的に示されれば、本書が明らかにした膨大な事実は一層の精彩を放つことになろう。

[阿部武司]